

※「ノートルダム清心女子大学国際教育研究会ニュースレター2021年6月号」をお届けします。

今号では、◆国際教育に関する動向、◆ノートルダム清心女子大学国際教育研究会主催「平和の未来デー2021」第一弾について、お知らせいたします。

## ○国際教育に関する動向

※この度、ユネスコより「UNESCO Science Report 2021」が出版されました。このレポートでは、**治部眞里氏**（ノートルダム清心女子大学国際教育研究会相談役、文部科学省科学技術・学術政策研究所上席研究官、下の写真）が、第24章「日本」（640-662ページ）を執筆されています。



### UNESCO Science Report 2021 The race against time for smarter development

【Chapter 24 Japan】  
Mari Jibu and Yoshiyuki Osabe



**概要** 〔仮訳・一部編集 西井麻美（ノートルダム清心女子大学国際教育研究会会長）〕

◆近年の日本社会・経済の動向（特に、東日本大震災後）を見ると、少子高齢化や、国内産業基盤の空洞化、低い対内投資額など、課題が山積しています。

国内のエネルギーについて、特に2011年の東日本大震災を契機とした原子力発電所の運転停止により、石油、ガス、石炭の輸入量が増加しており、新たな石炭発電所建設計画は温室効果ガス排出量削減目標を損なう可能性があるほか、原子炉再稼働は、エネルギー安全保障上の問題があります。

さらに、産業界では電力価格の高騰が深刻な課題となっています。このような状況の下、福島県は、全エネルギーを、2040年までに**自然エネルギー**でまかなうことを計画しています。

◆研究に焦点をあててみると、近年、財政が逼迫しており、政府が支出する研究費は、減少傾向にあります。唯一研究費が増加しているのは、産業界で、特に「**宇宙ビジネス**」領域は、研究費支出に顕著な伸びが見られます。日本は、先進諸国の中で、2011年以降、唯一科学論文の数が減少している希な国となっています。研究者の仕事が多様化し、学術研究で成果を上げる生産性に影響を及ぼしていると言えるでしょう。

また同時に、大学院の修士課程や博士課程への入学者数も減少しており、若者が、日本において学術研究でキャリアを積むことに幻滅している可能性を示唆しています。

◆政府は、これらの課題解決に向けて、2017年に「**Society5.0 (超スマート社会)**」を採択し、AIやロボットなどのデジタル技術の活用により、持続可能で包括的な社会経済システムへの移行を目指す新成長戦略を立ち上げました。

◆一方、大学は、2004年からの国立大学の半民营化を導入する制度改革により、民間部門との協力を強め、大学によるスタートアップの数は、2013年から2018年にかけて増加しました。

◆また、政府は、2019年に、地球温暖化による大規模な自然災害やサイバーテロなどの問題に対処する技術開発プログラム「**ムーンショット**」を開始し、世界中の研究者に参加を呼びかけています。

さらに、**持続可能な開発のための日本科学技術研究パートナーシップ**の新プロジェクトなどの立ち上げがなされています。

---

## ○ノートルダム清心女子大学国際教育研究会主催「平和の未来デー2021」第一弾

✿ノートルダム清心女子大学国際教育研究会では、毎年、6月の岡山空襲の日に過去を振り返り、平和について思いをはせた後、7月七夕前後に、これからの平和な未来を希求する「**平和の未来デー**」を開催してきています。一昨年までは、特別講義をしていただいていたのですが、昨年は、新型コロナの事態で、メッセージを寄せていただき、履修学生に配信し、感想を提出してもらいました。

今年も、少し趣向を変えて、第一弾として、**ブラジル大使館**が開催している「**在日ブラジル人コミュニティ(ブラジル人日本移住)30周年記念 『未来の形』を創造する』展**」(バーチャルでも開催)を学生に各自で見てもらい、感想を提出してもらいました。

この展覧会については、以下の通りです。

**ブラジル大使館主催 会場：ブラジル大使館イベントホール**

**「在日ブラジル人コミュニティ(ブラジル人日本移住)30周年記念 『未来の形』を創造する』展」**

◆今年2021年3月25日正午～6月25日、ブラジル人日本移住30周年を祝う企画展を、駐日ブラジル連邦共和国大使館が主催し、ブラジル外務省が後援となり、様々な日本・ブラジルの団体が協力して、開催しています。開催方法は、新型コロナ感染予防のため、バーチャルでも開催していて、そのおかげで、遠方からも参加しやすくなっていますね。そのため、サブテーマを「**デジタル改革**」としていて、コロナ環境下に於ける新しい「文化事業の形」を構築するとされています。

◆この展覧会の開催には、もう一つ、2016年にオリンピック・パラリンピックを開催したブラジル・リオデジャネイロと、2020/2021年にオリンピック・パラリンピックを開催する予定の日本・東京とで文化交流をおこない、両国・両都市の人々の間で絆を深め、未来を創造するバトンを渡していこうという目的があります。それで、この企画展のテーマは、「**『未来の形』を創造する**」となっています。

◆具体的な内容としては、「**マンガ文化**」に焦点をあてて、ブラジルを代表する国民的人気漫画家**マウリシオ・ヂ・ソウザ**と、日本を代表する漫画家である故・**手塚治虫**との深い交流をパネルで紹介しているほか、学校法人 静岡理工科大学 静岡デザイン専門学校の学生たちが考えたマウリシオ・ヂ・ソウザのキャラクターと日本の文化を融合させた作品もパネル展示しています。

✿ブラジル大使館の展覧会に参加した学生の感想を一部紹介します。

○長崎さくら（日本語日本文学科3年）

近年では在日ブラジル人も多くなっている中で、日本で働くことが目的というだけでなく、このようにそれぞれの国のマンガといった文化を通してつながりを感じられることが純粋にうれしいと感じた。また、私自身 日本のマンガやアニメは知っているものが多くあるが、海外のものほとんど知らないため、海外の人とのコミュニケーションをとる手段の1つとしても調べてみたいと感じた。



（写真 西井撮影）

○原口怜奈（人間生活学科3年）

私はマウリシオさんという方は初めて聞きました。彼と手塚治虫さんがそんな仲だとは初めて知りまし、結構仲が良かったのだと言うことがよく分かりました。手塚治虫さんのためなら嫌いな生の魚でも食べるなんて私には出来ないことだからよほど信頼していたのだと思いました。奥さんも日本人ということで日本との接点も多く、日本にも来たこともあると言うことでかなり日本のことを分かって下さっている方で私はそんな彼を全く知らなかったので少し知っていきこうかなと思いはじめました。日本とブラジル、サッカーとかしか関係ないと思っていたけれど漫画というところでも共通しているところがあるのだと思いました。

○平賀友梨（人間生活学科2年）

今回、『未来の形』を創造する」展に参加したことで、同じ日本人であり親しみのある手塚治虫さんがブラジルで活躍しているマウリシオさんと仲が良かったということを知ったり、日本文化とマウリシオさんのキャラクターを融合させた作品を見たりして、遠く離れた土地ではあるが、ブラジルに親近感を持った。このような他国の人物とコラボレーションした企画展を行うことで、企画に参加した人も、展覧会に参加した人も、他国に愛着を感じたり、関心を持ったりすることができるのだと実感した。

また、私は今回初めてバーチャルで開催された展覧会に参加した。今まで、このようなバーチャル展覧会に対して、バーチャルで参加しても楽しめないのではないか、実際に足を運んで観るからこそ楽しいのではないかと、思っていた。しかし、実際にバーチャルで参加してみると、その場に行ったような雰囲気も感じられたり、奥に進んで新たな展示物を見つめることにワクワクしたりして、楽しみながら展覧会に参加することができた。

○池上まこ（児童学科2年）

手塚治虫とマウリシオ・ヂ・ソウザの間で行われていた日本とブラジルの交流が終わってしまうことなく、マウリシオ・ヂ・ソウザのキャラクターなどを通して学生達が作品を手がけ、二人の作品や国際的な交流は未来へとつながっていることが分かりました。また、この展覧会ではバーチャル展覧会という新しい形式を取り入れており、新型コロナウイルスが流行している現在にも対応できる「未来の形」の創造の第一歩のように思えました。

○岡田侑子（英語英文学科1年）

ブラジルと日本にマンガを通じた関わりがあることは知らなかった。漫画を通してブラジルとの関係を深く友好的にしていくのはとてもいいことだと思ったし、自然環境問題や新型ウイルスの蔓延、遺伝子汚染などの複雑で解決が難しい問題についても漫画で年齢や空間を超えて多くの人が考えるようになったらいいと思った。

○神垣千夏（英語英文学科1年）

私は、ブラジルにルーツがある友達があり、ブラジルをとて身近な国だと思っていました。しかし、ブラジルと日本が漫画でつながっているということを知りませんでした。マウリシオ・ヂ・ソウザさんと手塚治虫さんの友情によって国を超えてお互いの漫画のキャラクターが新しい物語を作り出しているということを知るととても素敵だと感じました。また、学生の方々が考えた日本文化とモニカの融合の展示がとても興味深かったです。子供から大人まで日本人もブラジルの方も楽しんでお互いの文化を学ぶきっかけになるのではないかと思います。私も何かブラジルと日本の関係を深めるお手伝いができたらと思います。

○田邊香帆（英語英文学科1年）

一つ一つのパネルを全て見る事が出来たり、自分の好きなどころから見る事が出来たりするなど私自身その

場にいるような気がしました。また大使のメッセージなども実際に見ることが出来、さらに日本語の字幕付きだったのでとても見やすかったです。展示されているパネルもブラジル語と日本語の二言語で紹介されていたのも二言語を比較しながら見ることが出来てとても面白かったです。このような素晴らしい展覧会が開催されていることを知ることが出来て良かったなと思います。

#### ○種池咲乃（英語英文学科1年）

この展覧会をVRで見ると、このような取り組みが行われていることを知らなかったし、もちろんブラジル人の漫画家のマウリシオ・デ・ソウザさんのことも今回初めて知りました。こんなにも日本と漫画を愛している人の存在を知ることができて本当に良かったです。「モニカ&フレンズ」にも興味がわきました。

また、マウリシオ・デ・ソウザさんの言葉で心に残ったのは、「地球は一つの国で、みんなその市民なのです。」という言葉です。今の時代は、グローバル化と言われており、私は英語でコミュニケーションが取れないといけなはずとずっと考えていました。しかし、今回の展覧会で国籍が違ってもお互いを思いやることで友好関係を築いていた人たちの姿を目の当たりにして、これから生きていくためには英語力だけでなく、相手のことを尊重したり深く理解したりする気持ちも同じくらい大切だということを感じました。また、今はまだ難しいかもしれませんが、近い将来、白人や黒人といった肌の色で差別をすることなく、全員が地球に住む同じ人間であるという考えが世界中に広まってほしいと思いました。

#### ○豊田美紗樹（英語英文学科1年）

マウリシオ・デ・ソウザさんは漫画冊子をアニメ化した「日本とブラジル 友情の絆」で異なる文化的背景も円満で建設的な多文化共生につながるきっかけとなるということを示したり、代表作の「モニカ&フレンズ」でも社会的テーマを扱ったりしていて素晴らしい方だと思いました。たくさんの読者がいる影響力のある作品でこのようなことを伝えていくと、幼少期から社会に目を向けることになり、未来にもつながっていくので漫画文化や漫画家の偉大さを感じました。また、私は手塚治虫さんについても詳しく知らなかったのですが、作品で生命の尊さに触れている背景には医者を目指したことがあり、医師免許も取得していたということには驚きました。二人の友情にはお互いの人柄の良さがにじみ出ていて心が温くなりました。また、私は小さい頃「鉄腕アトム」を毎週テレビにかじりついてみていたのを思い出し、とても懐かしかったし、また見たいと思いました。マウリシオ・デ・ソウザさんは手塚さんを兄のように慕っており、手塚さんが亡くなった後も、二人の作品のキャラクターが共演することで、二人の間の敬意と友情は消えることなくずっと続いているのだということはすごく印象に残りました。また、静岡デザイン専門学校の方々の作品は本当にアイデアが豊富で、良い作品はこうしていろんな形になって受け継がれていっているのだと知ることができました。

#### ○蟹江晶（日本語日本文学科1年）

私は、なぜ日本とブラジルがこのように親密であるのか気になって調べてみたところ、ブラジルには海外で最大の約200万人の日系人、及び日本では20万人の在日ブラジル人の存在という特別な人的絆にあるようだ。今回のブラジル大使館主催の展覧会はこの人的絆を主として開催されている。この絆を結んだのは日本の文化の象徴ともいわれている漫画だそうだ。漫画は手に取りやすく、後世に残りやすい。漫画でブラジルと日本が親密に交流していたことは未来にも継続されていくべきであり、この交流から未来が形造られているといっても過言ではないと考えた。

#### ○片山奈々（日文日本語学科1年）

「未来の形を創造する」という展覧会を開催することはほかの国との絆が深まる良いきっかけになると思う。私はこの動画を見て日本の漫画と海外の漫画の違いについて知りたくなった。日本の漫画とブラジルの漫画では異なる部分が多くあると思うのでお互い良い刺激になり、新たな作品が生まれると思う。また、共同でコラボ作品を作ることは実現できなかったけれど、マウリシオさん自身が約束を果たしたことを見てこの2人は固い絆で結ばれているのだと感じた。そして手塚さんにもこの熱意はしっかりと伝わっていると思う。ほかの国の文化を伝えていくためには若い世代の人たちに伝えていくことが大切であり、そうすることで後世にも伝わっていくのだ。

両国の絆が未来の世代にも続くように様々な展覧会をこれからも開催して行ってほしい。

○鎌田栞璃（日本語日文学科1年）

世界の反対側にあるブラジルと日本でマウリシオ・ジ・ソウザさんと手塚治虫さんが交流し漫画を通して、「平和を求める冒険アニメ映画を一緒に作る」という壮大な約束を交わして、手塚治虫さんの死後もその約束が漫画を通じて世界で有名になっていることがもの凄いなと思いました。言語や環境が全く違う土地でも個性的なキャラクターが繰り広げる冒険や、好きな、若しくは知らなくても面白そうなキャラクター同士がコラボしていることに関する興奮は同じなのだと思います。漫画を通してブラジル語を覚えたり、他国に興味を持つきっかけになることで、勉強の一環になることがとても感慨深いです。

静岡デザイン専門学校の方々の作品もブラジルのキャラクターと日本の文化を融合して国境だけではなく、年齢や目の不自由な人に関わらず誰でも楽しく、使うことのできる物ばかりでとても心惹かれました。

○住井真未（日文日本語学科1年）

ブラジルは日本以外の国からも、移民で来ている人々やアフリカから連れて来られた人々などたくさんの原住民以外の人種からなる多元文化国家である。

また、文化・スポーツ活動を積極的に広めることで、人々の人生を豊かにすることができる学習を行っている。博物館や競技場などを国が積極的に造ることで、国民が文化やスポーツに接する機会が増えると考えた。

「未来の形」を想像する展では、手塚先生の絵に似たキャラクターが一杯いて、日本文化が海を越えてブラジルまで届いているということにビックリした。またアニメも日本のアニメみたくなものだけでなく、ほぼ人間の声だけで構成された「モニカトイ」というアニメもあることが新しいと感じた。

VRで行うという新しい方法をとっていて、コロナ禍でも簡単に作品を見ることができる。

○宮崎那月（現代社会学科1年）

展覧会をバーチャルから見て感じたことは、ブラジルと日本のつながりの強さだった。1908年をはじめとして多くの日本人がブラジルへと移住、そして居住地として暮らし今や日系ブラジル人も数多くいるということは知っていたが、これほどまでにつながりが深いとは思ってなかった。特に漫画を通じた関わりがあったのは初めて知ったことだ。私が一番関心があったのは、手塚治を代表とした漫画家との交流の中でブラジル人漫画家が描いた移民110周年記念の漫画だ。理由として、パネルにもあったように異文化への理解をするためのヒントとして活用することができ、多文化共生社会の実現の一步にもあると考えたからだ。高校の頃にゼミ活動で多文化共生について調べており、多文化共生社会の実現に1番必要なのは、言語などではなく周りの理解などが大切になっていくという結果になったので、ここのパネルのように人々が理解することにつながるような漫画という存在はとても良いと思った。加えて、絵という存在の世界共通のものの重要性も多文化共生社会に必要なと考えた。

○山田実夢（人間生活学科1年）

日本とブラジルという遠く離れた人たちが自分の知らない時代から知り合っていて、交流していたことに対しても感動しました。展覧会を見て、実際に手塚治虫さんの書かれた作品のような仕上がりの絵が飾ってあり、絵の中での国際交流が行われていると感じました。生きているうちに合同の作品をつくることはかなわなかったけれど、それ以上の価値のある作品ができていないかと思いました。絵の中で互いが呼応しているように見えて、作品を見てとても感激しました。国際交流とは人と人が触れ合うことだけではないとこの展覧会を見て感じました。日本のものを取り入れ強調していく行為こそが交流につながるものだと教えていただきました。ありがとうございました。

ノートルダム清心女子大学国際教育研究会ニュースレター 2021年6月号  
発行：ノートルダム清心女子大学国際教育研究会（担当：西井麻美）  
〒700-8516 岡山市北区伊福町二丁目16-9 ノートルダム清心女子大学内  
電話：086-252-1155（代表）

